

冗談に殺す

夢野久作

青空文庫

私は「完全な犯罪」なぞいうものは空想の一種としか考えていなかった。丸之内の某^{ほうしゃ}社で警察方面の外交記者を勤めて、あくまで冷酷な、現実的な事件ばかりで研^とぎ澄^すまされて来た私の頭には、そんなお伽^{とぎばなし}話じみた問題を浮かべ得る余地すら無かった。そんな話題に熱中している友達を見ると軽^{けいべつ}蔑したくなる位の私であった。

その私が「完全な犯罪」について真剣に考えさせられた。そうして自身にそれを実行すべく余儀なくされる運命に陥ったという

のは、実に不思議な機会からであった。すべてが絶対に完全な犯行の機会を作つてグングンと私を魅惑して来たからであつた。

今年の正月の末であつた。私はいつもの通り十二時前後に社を出ると、寒風の中に立ち止まつて左右を見まわした。私は毎晩社を出てから、丸之内や銀座方面をブラブラして、どこかで一杯引っかけてから、霞ヶ関の一番左の暗い坂をポツポツと登つて、二時キツカりに二年^{さんねんちよう}町の下宿に帰る習慣がついていたので……
そうしないと眠られないからであつたが……今夜はサテどっちへ曲ろうかと考えたのであつた。

するとその私の前をスレスレに、一台の泥ダラケのフォードが近づいて来たと思うと、私の鼻の先へ汚れた手袋の三本指があら

われた。それは新しい鳥打帽を眉深く冠まぶかつて、流感除よけの黒いマスクをかけた若い運転手の指であつたが……私はすぐに手を振つて見せた。

けれども自動車は動かなかつた。今度は運転手がわざわざ窓の所へ顔を近づけて、私にだけ聞こえる細い声で、

「無賃ただでもいいんですが」

といった。ドウヤラ笑つている眼付である。

私はチョット面喰つた……が……直ぐに一つうなずいて箱の中に納まつた。コイツは何か記事タネになりそうだ……と思つたから……すると運転手も何か心得ているらしく、行先も聞かないままスピードをだして、一気に数寄屋橋を渡つて銀座裏へ曲り込んだ。

その時に私はいくらかドキドキさせられた。いよいよ怪しいと思つたので……ところが間もなく演舞場の横から、築地^{つきじ}河岸^{がし}の通りの少いところへくると、急にスピードを落した運転手が、帽子とマスクを取り除^のけながらクルリと私の方を振り向いた。

「新聞に書いちゃイヤヨ。ホホホホ……」

私は思わず眼を丸くした。

それは二週間ばかり前から搜索願が出ている、某会社の活劇女優であつた。彼女はズツト前に、ある雑誌の^{りようき}猟奇^{りようき}座談会^{りようき}でタツ

タ一度同席した事のある断髪^{だんぱつ}のモガで、その時に私がこころみた

「殺人芸術」に関する漫談を、蒼^{あおしろ}白^{しろ}く緊張しながら聞いていた

顔が、今でも印象に残っているが、それが「女優生活に飽きた」

という理由でスタジオを飛びだして、東京に逃げ込んでくると、所もあろうに三年町の私の下宿の直ぐ近くにある、小さなアバラ家やを借りて弁当生活をはじめた。そうして男のような本名の運転手免状を持っているのを幸いに、そこいらのモーロー・タクシーの運転手に化けこんで、モウ大丈夫という自信がついてから悠々うと私を跟つけまわしはじめた……と彼女は笑い笑い物語るのであつた。モウ一度、

「新聞に書いちや嫌いやよ」

と念を押しながら……。

彼女の話の聞いた私は何よりも先に、彼女が特に私を相手に選

んだそのアタマの作用に少からぬ関心を持たされた。彼女がコンナにまで苦心をして、絶対の秘密のうちに私を追っかけまわした心理の奥には、何かしら恋愛以上の或るものが潜んでいて違くないことが感じられる……その心理の正体が突き止めて見たくなかった。同時に彼女の男装の巧たくみさにも多少の興味を引かれたので、そのまま二人で絶対安全の秘密生活を始めるべく、自動車をグルグルまわしながら打ち合わせをしたのであった。

その結果、私は毎晩、社の仕事が済むと、例の習慣を利用して、一時間だけ彼女のところに立寄る事になった。彼女も引続いて毎日、運転手姿で市中を流しまわる事にした。そうして私の前でだけ女になる事にきめた……一日にタツタ一時間だけ……。

……すこぶる簡単明瞭めいりょうであった。しかも、それだけに私達の秘密生活は、百パーセントの安全率を保有している訳であったが……。

ところがこの「百パーセントの安全率」がソツクリそのまま「完全なる犯罪」の誘惑となつて、私に襲いかかるようになったのは、それから間もなくの事であつた。……二人の秘密生活がはじまつてから一週間も経たないうちに、彼女の性格の想像も及ばぬ異常さが、マザマザと私の眼の前に露出しはじめてからの事であつた。

彼女は何の飾りも無い、殺風景なアバラ家の中でホット・イスキーを作るべく湯をわかして私を待っている間に、色々なイタズ

ラをして遊んでいるらしかった。……むろん私は彼女が、何かしら特別な趣味を持っているらしい事を、初対面から察しているにはいたが、しかし、それが始めて私の眼に触れるまでは、まさかにコンナ非道い趣味であろうとは、夢にも想像していなかった。それは商売の警察廻りで、アラユル残忍な事件に神経を鍛えあげられて来た私でさえも、正視しかねた程の残酷な遊戯であった。

彼女は、どこからか迷い込んで来たポインター雑種の赤犬を一匹、台所のタタキの上に繋いで、バタを塗ったジレットの古刃を三枚ほど喰わせて、悶死させているのであった。もつとも私が彼女の門口を推した時には、最早、犬は血の泡の中に頭を投げ出して、眼をウツスリと見開いているだけであつたが、それでもタ

タキの上に一面に残っている血みどろの苦悶の痕跡あとを一眼見ただけで、ゾツとさせられたのであった。

「……ホホホホ……何故モツト早く来なかったの。アンタに見せようと思つて繋いどいたのに……。あのね……。ジレットを食べさせるね。噛もうとする拍子に、奥歯の外側に引つかかつてナカナカ取れないのよ。だから苦しがつて、シヤツクリみたいな呼吸いきをしいしい狂いまわるの……。それをこの犬つたらイヤシンボでね。三枚も一緒にペロペロと喰べたもんだからトウトウ一枚、嘔のみ込んだじやつたらしいの。それで死んだに違ひ無いのよ。ちようど四十五分かかつてよ、死ぬまでに……。それあ面白かつてよ。息も吐つけないくらい……。犬なんて馬鹿ね。ホントに……」

「……………」

「……アンタ済まないけどこの犬に石を結い^{ゆわ}付けて、裏の古井戸に放り込んでくれない。前のテニススコートの垣根の下に、石ころだの針金だのがいくらでも転がっているから……タタキの血は^{わたし}妾がホースで洗つとくから……ね……ね……ね……」

そういううちに彼女は突然にキラキラと眼を輝かした。……と
思う間もなく、バタと犬の臭^{しゅうき}気にしみた両手をさし伸ばして、
イキナリ私の首にカジリつくと、ガソリン臭^{くさ}いキスを幾度となく
私の頬に押しつけるのであった。

しかし私は最前から吐きそうな気持ちになっていた。そうした
色々な臭気の中で、底の知れないほど残忍な彼女の性格を考えさ

せられたので……それが彼女の接吻せつぶんを受けているうちにイヨイヨたまらなくなつたので……私はシツカリと眼をつむつて、思い切り力強く彼女を押し除けると、その拍子に彼女はドタンと畳の上に尻もちを突いた。そうしてそのままテレ隠しらしく靴下を脱ぎながら、高らかに笑いだした。

「オホホホホ。駄目ねアンタは……。わたしの気持ちかわからないのね。……でも今にキツトわかるわよ。アンタならキツト……オホホホホ……」

私はやはり眼を閉じたまま、頭を強く左右に振つた。そういう彼女の心持が、わかり過ぎる位わかつたので……彼女が、こうした遊戯の刺激でもって、その性的スパスムを特異の状態にまで高

潮させる習慣を持った、一種特別の女であることが、この時にや
つと分つたので……そうして同時に彼女はこの私を、彼女のこう
した趣味の唯一の共鳴者として、初対面からメモリをつけていた
に違い無い……その気持までもがアリアリとうなずかれたので……

それは彼女自身にも気づいていない、彼女の本能的な もうじょう 盲情

であつたらうと考えられる。……その盲情が、ズツト前の猟奇座
談で、私がこころみた漫談に刺激されて眼ざめた結果、こんな趣
味に囚とらわれるようになった。そうしてその結果、彼女はこうして
一切を棄てて、本能的に私と結びついてくるようになったのでは
ないか……それを彼女は私に恋しているかのように錯覚している

のではないか……。

……と……ここまで考えてくると、私は思わず又一つ、頭を強く左右に振った。髪かみのけ毛がザワザワして、背中がゾクゾクし始めたので……。

しかも彼女のこうした心理は、それから又二三日目に、彼女が肉片を引っかけた釣針で、近所のドラ猫を釣って、手繰たぐったり、ゆるめたりして遊んでいるのを発見した時に、イヨイヨドン底まで印象づけられたのであった。同時に彼女が、こうした趣味の道み伴れちづとして私を選んだのが、飛んでもない間違いであった……私の中には彼女の想像した以上の恐ろしいものが潜うなずんでいた……という事実までも、私自身にハッキリと首肯うなずかれたのであった。

彼女はその時に私の機嫌を取るつもりであつたらしい。釣糸の先に引つかかつた一匹の虎斑とらふちの猫を、ここに書くさえ気味のわるいアラユル残忍な方法でイジメつけながら、たまらないほど腹を抱えて笑い興じるのであつた。声も立て得ないまま瞳めを大きく見開いているその猫のタマラナイ姿を一生懸命の思いで、生汗なまあせをかきかき正視しているうちに、私は、私の神経がみるみる恐ろしい方向に沓さえかえつて行くのに気がついていた。

……この女は有害無益な存在である。

……この女は地上に在りとあらゆる法律上の罪人のドレよりも消極的な、つまらない存在である。……と同時に、そのドレよりも誼のろわしい、忌いまわしい、しつっこい存在でなければならぬ。

……この女は外国の残虐伝ざんぎやくでんに出てくる女性たちの性格を、モツと小さくして、モツと近代的に尖鋭化せんえいかした本能の持主である……しかもこの女は、こうした趣味のためにワザワザ女優生活を飛びだして、人間世界から遠ざかって、こんなところに潜み隠れているので、私の眼に触れた動物以外に、まだドレ位の動物の死体を、裏の古井戸に投込んでいるかわからない……。

……この女はトテも私には我慢出来ない一つの深刻な悪夢である。……と同時に社会的にも、一つの尖鋭を極めた悪夢的存在でなければならぬ……。

……と……そんなような考えを凝視ぎょうししいしい、台所の暗いところと向き合って、眼を一パイに見開いている私の背後から、虎

の門のカーブを回る終電車の軌きりが、遠く遠く、長く長く響いて来た。

私はブーツとして思わず額の生なまあせ汗を撫であげた。見ると彼女はイツの間にか猫の死骸を……それは生きてままであったかも知れない……井戸の中に投込んでしまったらしく、寢床の中の電気こたつに暖まりながら、気持ちよさそうに眼を閉じていたのであった。

私が彼女を殺さねばならぬ運命をマザマザと感じたのは実にその瞬間であつた。……と同時に、その運命がみるみる不可抗的に大きな魅力となつて、ヒシヒシと私を取り囲んで、息も吐つかれぬ位グングンと私を誘惑し始めたのも、実にその寝顔を見下した次

の瞬間からであった。

……この悪夢をこの世から抹殺し得るものは、この世に一人しか居ない。ここに突つ立っている私タツタ一人しか居ない。……この女を殺すのは私の使命である。

……否^{いな}。否^{いな}。この女は私と初対面の時から、こうなるべく運命づけられていたのだ。……その証拠にこの女はこの通り、絶対に安全な犯罪を私に遂^とげさせるべく、自ら進んでここに来ているではないか……そうしてこの通りジツと眼を閉じて、私の手にかかるとべく絶好の機会を作りつつ、待っているではないか。

……私は彼女の死体をここに寝かして、電燈を消して、いつも
の時間通りに下宿に帰ればいいのだ。何も知らずに眠ってしまえ

ばいいのだ。そうして明日あすの晩から又、以前もとの通りの散歩を繰返せばいいのだ。

……運命……そうだ……運命に違い無い……これが彼女の……。

こんな風に考えまわしてくるうちに私は耳の中がシイ——ンとなるほど冷静になって来た。そうしてその冷静な脳髓で、一切の成行きを電光のように考えつくすと、何の躊躇ちゅうちよもなく彼女の枕許にひざまずいて、四五日前、冗談にやってみた通りに、手袋のままの両手を、彼女のぬくぬくした咽喉のど首へかけながら、少しばかり押えつけてみた。むろんまだ冗談のつもりで……。

彼女はその時に、長いまつげをウツスリと動かした。それから大きな眼を一しきりパチパチさして、自分の首をつかんでいる二

つの黒い手袋と、中折帽子を冠ったままの私の顔を見比べた。それから私の手の下で、小さな咽喉のどぼとけ仏を二三度グルグルと回まわして、唾液つばきをのみ込むと、頬を真赤にしてニコニコ笑いながら、いかにも楽しそうに眼をつむった。

「……殺しても……いいのよ」

二

私が何故なにゆえに、彼女を殺したか。

その彼女を殺した手段と、その手段を行った機会とが、如何いかに完全無欠な、見事なものであったか。

そうして、そういう私はソモソモどこの何者か。

そんな事は三週間ばかり前の東京の各新聞を見てもらえば残らずわかる。多分特号活字で、大々的に掲載してあるであろう「女優殺し」の記事の中に在る「私の告白」を読んでもらえば沢山である。そうしてその記事によつて……かくいう私が、某新聞社の社会部記者で、警察方面の事情に精通している青年であつた。同時に極端な唯物主義的なニヒリスト式の性格で、良心なぞというものとは旧式の道徳観から生まれた、遺伝的感受性的一部分ぐらいにしか考えない種類の男であつた……という事実をハッキリと認識してもらえば、それで結構である。

ところでその私が、現在、ここで係官の許可を得て、執筆して

いるのは、そんな新聞記事の範囲に属する告白ではない。又は警察の報告書や、予審調書に記入さるべき性質の告白でもない。すなわち、その新聞記事や、予審調書にあらわれているような告白を、私がナゼしたかという告白である。……事件の真相のモウ一つうらに潜む、極めて不可思議な恐ろしい真相の告白である。……すべての犯罪事件を客観的に考察し、批判する事に狎なれた、頗すこぶる鋭利な、冷静な頭の持主でも意外に思うであろう……光明の中心×暗黒の核心ⅡX……とも形容すべき告白である。

冗くどく云うようであるが、私はモウ一度念を押しておきたい。

あの新聞記事を徹底的に精読してくれた、極めて少数の人々……もしくは直感の鋭い、或る種のアタマの持ち主は直ぐに気付い

たであろう。私はこの事件に就^ついては、どこまでも知らぬ存ぜぬの一点張りで、押通し得る自信を持っていた。如何なる名探偵や名検事が出て来ても、一分一厘の狂い無しに「証拠不十分」のところまで押し付け得る、絶対無限の確信を持っていた……という私の主張を遺憾なく首肯^{いかん しゅけん}してくれるであろう。……にも拘^{かか}わらずその私が、何^{なに}故^{ゆえ}に自分から進んで自分の罪状をブチマケてしまったか……モウ一步突込んで云うと、良心なるものの存在価値を絶対に否認していた私……同時に自分の手にかけて彼女に対しては、一点の同情すら残していなかった筈の私が……何故にコンナにも他愛なく泥を吐いてしまったか……ホンの当てズツポーで投げかけた刑事の手縄に、何故にこっちから進んで引つかかつて行

つたか……。

……こうした疑問は、あの記事を本当の意味で精読してくれた何人かの頭に必然的に浮かんだ事と思う。「何故に私が白状したか」という大きな疑問に、一直線にぶつかった筈と考えられる。

ところが不思議な事に、この事件を担当した警察官や裁判所の連中は、コンナ事をテンカラ問題にしていならしい。現在私を未決監^{みけつ}にブチ込んでいながら、この点に関しては一人も疑問を起したものが居ないらしい。それはこの点について、私に訊^{じんもん}問した事が一度も無い……という事実が、何よりも雄弁に証拠立てている。

しかし考えてみるとこれは無理もない話である。彼等は私の自

白にスッキリ満足してしまつて、ソレ以上の事に気が付かないでいるのだから……。彼等は要するに犯人を捕える無智な器械に過ぎないのだから……。そうしてそんな器械となつて月給を取るべく彼等は余りに忙し過ぎるのだから……。

だから私はこの一文を彼等の参考に供しようなぞ思つて書くのではない。あの記事を精読してくれて、私の自白心理に就いて疑問を起してくれた少数の頭のいい読者と、わざわざ私のために係官の許可を得て、この紙と鉛筆とを差し入れてくれた官選の弁護士君へ、ホンの置^{おきみやげ}土産のつもりで書いているのだ。

そうして私の「完全な犯罪」を清算してしまいたい意味で……。

私は「彼女の死」以外に、何等の犯跡を残していない空屋を出ると、零度以下に冷え切った深夜のコンクリートの上を、悠悠々々と下宿の方へ歩いて帰った。それは、いつも新聞社からの帰りだけに、散歩をしている通りの足取であつたが、あんまり寒いせいか、途中には犬コロ一匹居なかつた。ただ街路樹の処々しよしよに残つた枯葉が、クローム色の星空の下で、あるか無いかの風にヒラリヒラリと動いているばかりであつた。

すべてが私の予想通りに完全無欠で、且つ理想的であつた。

「完全なる犯罪」を実行し得る無上の一刹那せつなを、私のために作り出してくれた天地万象が、どこまでも私のアタマのヨサを保証すべく、私の註文通りに動いているかのようであつた。こころみに

下宿の門かどぐち口に立ち止まって、軒燈けんとうの光りで腕時計を照してみると、いつも帰って来る時間と一分も違っていないかった。

……彼女はモウ、これで完全に過去の存在として私の記憶の世
界から流れ去ってしまったのだ。そうして私はこれから後のち、当分
の間、毎晩その通りの散歩を繰返せばいいのだ。あの空家で彼女
と媾あいびき曳ひすることだけを抜きにして……。

そう思い思い私は下宿の表口の呼鈴よびりんを押して、門かどを外してく
れた寝ぼけ顔の女中に挨拶をした。いつもの通りに「ありがとう
……お休み」……と……。その時に、帳場の上にかかった柱時計
が、カツタルそうに二時を打った。

その時計の音を耳にしながら私は、神経の端の端までも整然と

して靴の紐を解く事が出来た。それから、いつもの足どりで、うつむき勝ちに階段を昇ったが、それは吾れながら感心するくらい平気な……ねむたそうな蹠音あしおととなつて、深夜の階上と階下に響いた。

……もう大丈夫だ。何一つ手ぬかりは無い。あとは階段の上の取っ付きの自分の室へやに這入はいつて、いつもの通りにバツトを一本吹かしてから蒲団ふとんを引つかぶつて睡ればいいのだ。……何もかも忘れて……。

そんな事を考え考え幅広い階段を半分ほど昇つて、そこから直角に右へ折れ曲る処に在る、一間四方ばかりの板張りの上まで来ると、そこで平生いっしょの習慣が出たのであろう、何の気もなく顔を上

げたが……私は思わずハツとした。モウすこしで声を立てるところであつたかも知れなかつた。

……「私」が「私」と向い合つて突立っているのであつた……板張りの正面の壁に嵌め込まれた等身大の鏡の中に、階段の向うから上つて来たに違ひ無い私が、頭の上の黄色い十燭しよくの電燈に照らされながら立ち止まつて私をジツと凝視しているのであつた。

……蒼白い……いかにも平氣らしい……それでいて、どこことなく犯人らしい冴え返つた顔色をして……底の底まで緊張した、空虚な瞳めを据えて……。

「この鏡の事は全く予想していなかつた」……と気付くと同時に私は、私の全神経が思いがけなくクラクラとなるのを感じた。私

の完全な犯行をタツタ今まで保証して、支持して来てくれた一切のものが、私の背後で突然ガランガランガランと崩壊ほうかいして行く音を聞いたように思った。……同時に、逃げるように横の階段を飛び上って、廊下の取っ付きの自分の室へやに転がり込んで行く、自分自身を感じたように思った……が、間もなく、その次の瞬間には、もとの通りに固くなつて、板張りの真中に棒立ちになつたまま鏡と向い合っている自分自身を発見した。……自分自身に、自分自身を見透みすかされたような、狼狽ろうばいした気持ちのまま……。

するとその時に、鏡の中の私が、その黒い、鋭い眼つきでもつて、私にハッキリとこう命令した。

「お前はソナナに凝然と突立っていてはいけけないのだぞ。今夜に限つてこの鏡の前で、そんな風に特別な素振をするのは、非常な危険に身を晒す事になるのだぞ。一秒 躊躇 躊躇すれば一秒だけ余計に「自分が犯人」である事を自白し続ける事になるのだぞ。

……しかし、そんなに神経を動揺させたまま俺の前を立ち去るのは尚 更ケンノンだ。お前は今すぐに、そのお前の全神経を、いつもの通りの冷静さに立ち帰らせなければならぬ。そうして平生の通りの平気な足取りで、お前の右手の階段を昇つて、自分の室に帰らなければならぬ。……いいか……まだ動いてはいけけないぞ……お前の神経がまだ震えている……まだまだ……まだまだ……

……」

こんな風に隙間もなく、次から次に命令する相手の鋭い眼付きを、一生懸命に正視しているうちに私は、私の神経がスーツと消え失せて行くように感じた。それにつれて私の全身が石像のように硬直したまま、左の方へグラグラと傾き倒れて行くのを見た：：ように思いながら慌てて両脚を踏み締めて、唇を血の出るほど噛み締めながら、鏡の中の自分の顔を、なおも一心に睨み付けていると、そのうちにいつの間にか又スーツと吾に返る事が出来た。やっと右手を動かして、ポケットからハンカチを取り出して、顔一面に流るる生^{なま}汗^{あせ}を拭うことが出来た。そうすると又、それにつれて私の神経がグングンと弛^{ゆる}んで来て、今度は平生よりもズツト平気な：：寧^{むし}ろガツカリしてしまつて胸が悪くなるような、ダ

レ切った気持になつて来た。

私は変に可笑しくなつて来た。タツタ今まで妙に狼狽して自分の姿が、この上もなく滑稽なものに思えて来た。そうして「アハアハアハ」と大声で笑い出してみたような……「笑つたつていいじゃないか」と怒鳴つてみたいようなフザケた気持になつた。

私は鏡の中の自分を軽蔑してやりたくなつた……「何だ貴様は」とツバを吐きかけてやりたい衝動で一パイになつて来た。そこでモウ一度ポケットからハンカチを出して顔を拭い拭い、そこいらをソツト見まわしてから、鏡の中を振り返ると、鏡の中の私も亦、瀬戸物のように、血の気の無い顔をして、私の方をオズオズと見

返した……が……やがて突然に、思い出したように、白い歯を露^{あら}わして、ひややかにアザミ笑った。

私は思わず眼を伏せた。……ゴツクリと唾^{つば}液を呑んだ。

それから一週間ばかり後の^{のち}或る朝であつた。私はいつもの通り朝寝をして、モウ起きようか……どうしようかと思ひ思ひ、昨夜^{ゆうべ}新聞社から持つて帰つた、今日の朝刊を拵げていると、階下の帳場で話している男と女の声が、ゆくりなくも障子越しに聞えて来た。私はその声を聞くと新聞から眼を離れた。……ハテ……どこかで聞いたような……と思ひ思ひ新聞を見るふりをして聞くともなく聞いていると、それは顔^な馴染^{なじ}みの警視庁のT刑事と、下宿の

女将おかみの話声だった。

「フ——ン……何かその男に変わった事は無いかね……近頃……」

T刑事は有名な胸間どうまごえ声であつた。

「イイエ。別に……それあキチヨウメンな方ですよ」

女将も評判のキンキン声であつたが、きようは何となくお覷びえ
ている様子……。

私は新聞紙を夜具の上に伏せて、天井の木目を見ながら一心に
耳を澄ました。大丈夫こつちの事ではない……と確信しながら……。

「フ——ン。身ぶり素振りや何かのチョツトした事でもいいんだ
が……隠さずに云ってもらわんと、あとで困るんだが」

「……ええ……そう仰おっしや有ればありますよ。チヨツトした事ですけども……」

「どんな事だえ」

「……」

女将の声が急に聞えなくなつた。T刑事の耳に口を寄せて囁ささやいているらしい気はいであつたが、ジツと耳を澄ましている私には、そうした芝居じみた情景がアリアリと見透かされて、何となく滑稽な気持ちにさえなつた。……と思ううちに又も、T刑事の太い声が筒抜けに聞え初めた。

「……ウ——ム……。いつも鏡の前を通るたんびにチヨツト立ち止まるんだな。ウンウン。そうしてネクタイを直して、色男らし

い気取った身振りを一つして、シャツポを冠り直して降りて行く。

……それがこの頃その鏡を見向きもしない。色っぽい男だから、そんな癖くせは女中がみんな気を付けて知っている……この一週間ばかり……フ——ン……ちようど事件の翌日あたりからの事だな……フ——ム……モウ外ほかには無いかね……気の付いた事は……」

私はガバと跳ね起きた。社に出るにはまだ早かったが、そんな事を問題にしてはいられなかった。しかし決して慌てはしなかった。万一の用心のために、あらゆる場合を予想していたのだから……手早く着物を脱ぎ棄てて、テニスの運動服に着かえたが、その時に恥かしい話ではあるが胸が少々ドキドキした。まさか……まさかと思っていたのが案外早く手がまわったので……同時に些すく

なからず腹も立った。どうしても一番手数のかかる、最後の手段を執とらなければならぬ事が予想されたので……。

……彼奴等きやつらはいつもコンナ当てズツポー式の見込搜索をやるから困る。当り前に動かぬ証拠を押えて来るとなれば、百年かかってもここへ遣やつて来る筈は無いの……チエツ……。おまけに今、俺を引っかけようとしているトリツクの浅あさはか薄はくさ加減はドウダ……そんな古手に引つかかる俺と思うか……と云いたいが今度だけは特別をもって引つかかってやる……その古手を利用してやる。その代り一分一厘間違ひ無しに証拠不充分になって見せるから、その時に吠ほえつら面めんかくな……。

そんな事を思い思い運動服の上から、スエーターをぬくぬくと

着込んで、ガマ口を尻のポケットへ押し込んで、烏打帽子と西洋手拭と、ラケットと運動靴を抱えると、石^{せつけん}鹼を塗^{すべ}つて迂りをよくしておいた障子をソーツとあけて、裏町の屋根を見晴らした二階の廊下に出た。そこで念のために前後を見まわしたが誰も居ない。

……シメタナ。事によつたら今の芝居は、芝居じやなかつたかも知れないぞ。逃げる余裕が充分に在るのかも知れないぞ……しかしまだ往来まで出てみないとわからない……。

と考えながら裏口の階段に続く廊下を、もしやと疑いながら曲り込むと、果してそこに立っていた……張り込んでいたに違い無いAという、やはり警視庁の老刑事にバツタリと行き合ってしまった

った。

私はその時にハツと眼を丸くして立ち竦んだ……ように思う。何故かというところのAという老刑事が出て来る事は、殆んど十中八九まで確定した犯人を逮捕する時にきまっていたのだから……そうしてあの晩見た、鏡の中の自分の姿を、その瞬間にチラリと思ひ浮かべたように思つたから……。

A 刑事はゴマ塩の無性髭を撫でながらニツコリと笑つた。

「……ヤア……早くから……どこへ行くかね……」

私は二三度眼をパチパチさせた。すぐに笑い出しながら、何か巧い弁解をしようと思つたが、その一刹那に又も、鏡の中の自分の姿が、眼の前に立ち塞がったような気がしたので、思わずラケ

ツトを持った手で両方の眼をこすってしまった。

「……エ……エ……そのチヨツト……」

私は吾れながら芝居の拙いますのに気が付いた。腋の下から冷汗がポタポタと滴り落ちるのがわかった。老刑事も無論、私のいつに無いウロタエ方に気が付いたらしい。心持ち顔の筋肉を緊張させながらニツコリと笑った。

「チヨツトどこへ」

「テニスをしに行くんです……約束がありますから……」

老刑事は悠々と私を見上げ見下した。相かわらず顎あごを撫でまわしながら……。

「……フ——ン……どこのコートへ……」

私はここでヤツト笑う事が出来た。ドンナ笑い顔だったか知らないけど……。

「日比谷のコートです……しかし何か御用ですか」

「ウン……チョット来てもらいたい事があつたからね」

「僕にですか」

「ウン……大した用じゃないと思うが……」

「そうじゃないでしょう……何か僕に嫌疑をかけているのでしよう」

……平生の通りズバズバ遣^やるに限る……と予^{かね}てから覚悟していた決心が、この時にヤツト付いた私は、思い切つてそう云つてやった。すると果して老刑事の微笑が見る間に苦笑に変わつて行つた。

かなり面喰つたらしい。

「そ……そんな事じゃないよ。君は新聞社の人間じゃないか」

私は腹の中で凱歌がいかをあげた。ここでこの刑事を憤おこらして、遮しや二にむに無二私を捕縛さしてしまえばいいよ満点である。

「だってそうじゃないですか。何でも無い用事だったら電話をかけてくれた方が早いじゃないですか。まだ社に出る時間じゃないんですから直ぐに行けるじゃありませんか」

老刑事の顔から笑いが全く消えた。疑い深い眼付きをシヨボシヨボさして、モウ一度私を見上げ見下した。

その顔をこつちからも同時に見上げ見下しているうちに、私は完全に落ち付きを恢かいふく復した。頭が氷のようになって、あらゆる

方向に冴え返って行った。

私は事態が容易でないのをモウ一度直覚した。老刑事が私を容易に犯人扱いにしようとしなのは、証拠が不十分なままに私を的確な犯人と睨うばいんでいる証拠である……だから何とかして私を狼ろ狽うばいさして、不用意な、取り返しの付かないボロを出さしておいてから、ピッタリ押え付けようところみている、この刑事一流の未練な駄け引きであることが、よくわかった。

……しかし警視庁ではドウして俺に目星を付けたんだろう……その模様によつては慌てない方がいいとも思うんだが……ハテ……。

そう考えながらホンノ一二秒ばかり躊躇ちゅうそしているうちに、老刑

事は又もニコニコ笑い出しながら、私の耳に口をさし寄せた。そうして私が身を退くひ間もなく、ボソボソと囁き出したが、その云う事を聞いてみると、私が想像していたのと一言一句違わないといつてもいい内容であつた。

「……ええかね君……溫柔おとなしく従ついて来たまえ。悪くは計はからわんから。ええかね。君はあの女優が殺された空屋の近くに住んでい
るだろう。そうして毎晩、社から帰りにあの家の前を通つて行く
じやろう。それから手口が非常に鮮かでの証拠も残つておらん。
よほど頭と腕の冴えた人間で、手筋をよく知つている人間の仕事
に違わんといふので、極秘密ごくで研究した結果君に札が落ちたのだ
よ。別に証拠がある訳じやない。だから出る処に出ればキット証

抛不充分になる。これは絶対に保証出来る。ええかね。わかつとるじやろう……。これは職務を離れた心持ちで、君を助けたいばつかりに云う言葉じやから信用してくれんと困る。君は頭がええから解るじやろう。わしも君には今まで何度も何度も仕事の上で助けてもらったことがあるからナ……。ナ……。」

この言葉のウラに含まれている恐るべく、憎むべき罫わなが見え透かない私じやなかつた。同時にその裏を搔かいて行こうとしている私の方針を考えて、思わず微笑したくなつた私であつた。

しかし私は、そんな気けぶりを色に出すようなへまはしなかつた。そんな甘口に引つかかつて一寸ちよつとでも躊躇したら、その躊躇がそのまま「有罪の証拠」になる事を逸いちはや早く頭ひらに閃めかした私は、

老刑事の言葉が終るか終わらないかに、憤然として云い放った。

「……駄目です。冗談は止して下さい……僕を引っぱったら君等の面目は立つかも知れないが、僕の面目はどうなるんです。面目ばかりじゃない、飯の喰い上げになるじゃないですか。厚顔無恥にも程がある。……失敬な……退き^ど給え……」

と大声で怒り付けながら、老刑事を突き退^のけて裏口の階段の方へ行こうとしたが、この時の私の腹の工合は、吾^われながら真に迫った傑作であったと思う。老刑事のネチネチした老^ず獪い手段が、ホントウに自^じ烈^れ度^たくて腹が立っていたのだから……。

しかし、こうした私の行動が、滅多に無事に通過しないであろう事は、私もよく知っていた。

老刑事は私が思っていたよりも強い力で、素早く私の肩を押えて引き戻した。そうしてラケットと靴を持った両手をホンの一寸と引いたと思ったら、バツチリと生あたたかい手錠をかけてしまった。……と……私の背後の縁側からT刑事と、モウ一人の新米らしい若い刑事が、待ち構えていたように曲り角から出て来て、私の背後に立ち塞がってしまった。

私はその中でも見知り越しの二人の刑事の顔を、わざと不思議そうに見まわした。それから如何にも面目無い恰好でグツタリとうなだれる拍子ひょうしに、思わずヨロヨロとよろめいて横の壁にドシンと背中を寄せかけると、あとからT刑事がツカツカと近寄って来て、チョットお辞儀をするように私の顔を覗き込んだ。そう

して私を憫れあわむように……又は云い訳をするように、見え透いた空笑いをした。

「ハハハハハ。今の芝居に引つかかったね」

「……………」

「……………相手が君だと滅多にボロを出す気づかいは無い。トテモ一筋縄では行くまいとは思ったが、チョット鎌かまをかけたら案外引つかかってくれたんで助かったよ。まあ諦めてくれ給え。決して悪くは計らわれないからね……元来知らない仲じゃなし……ハハハハ……………」

そう云うT刑事の笑い声が終るか終わらないかに、頭を下げていた私は突然、脱兎だつとのように若い刑事の横をスリ抜けて、二階廊下

の欄干てすりに片足をかけて飛び降りようとした。無論、自殺の恰好で……それを若い刑事にシツカリと抱き止められると、そのまま両手の手錠を、眼の前の欄干らんかんへ碎けよと打ち付けながら、泣き声を振り絞って絶叫した。

「……嘘です……嘘です……間違いです……この手錠を取って下さい……冤罪えんざいです。僕は無罪です。……僕はあの女を知つてます。けども関係はありません。どこに居るかさえ知らなかった……僕は……僕は毎晩十二時に社を出て二時キツカリに下宿へ帰つて来るのです。ずっと前から……そうなんです……二三年前から……手錠を取って下さい。この手錠を……僕はテニスしに行くんです。天気がいいから……エエツ放して……放してエ——ッ」

しかしボールとテニスで鍛えた私の体力も、三人の刑事には敵^{かな}わなかった。これも無論、最初から知れ切った事であったが、しかし法廷で知らぬ存ぜぬを押し通すためには、その準備行動として、是非とも一度、徹底的に暴れておかねばならぬと思ったので……それからモウ一つには同宿の連中や、近所隣りの家族たちに同情的な心証を残しておく^{あと}と、後になってから非常に有利な事がある実例を知っていたので、コンナにヘトヘトになるまで、悲鳴をあげて抵抗し続けたのであった。

それから私は予定の通り、スエーターもパンツも破れ歪んだミジメな姿で、三人の刑事に引つ立てられて立ち上った。そうしてシツカリと眼を閉じて仰向いたまま、ハアハアと息を切らしなが

ら、板張りの廊下を真直に、表口の階段へかかったのであったが、その途中の鏡の前まで来ると、私は又もギツクリとして立ち止まった。この間の晩の通りに……何故だかよくわからないまま……

……大鏡の中には色の黒い、厳めしい三人の男と、いつの間にか鼻血にまみれている青ざめた、ミジメな私の顔が並んで突立っていた。

……その変り果てた自分の姿を、吸い付けられたような気持で凝視しているうちに、私は何故ともなく髪の毛がザワザワザワと逆立さかだつて来るのを感じた。私が構成した「完全無欠の犯罪」がこの鏡一つのためにコツパ、ミジンにブチ壊されてしまった事をハッキリと意識したように思った。

……と……気が付くと同時に私は、自分の姿と向い合つたまま、無限の谷底をグングン落ち込んで行くような感じがした。気が遠くなつてフラフラと倒れそうになつた。

それを一生懸命の思いで踏みこたえながら私は、鏡の中の自分の姿に向つて一歩踏み出した。今にも真暗くなりそうな瞳めをシツカリと据えながら、この世限りの憎々しい表情を作つて自分の顔の鼻の先に近づけた。思い切り顎を突き出して見せた。

「……オレダヨオ——オ——」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年1月22日第1刷発行

※「気持」「気持ち」の不統一は底本のママとした。

入力：柴田卓治

校正：柳沢成雄

2000年4月19日公開

2006年3月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

冗談に殺す

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>